
擬人化ポケモンの世界に転生

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

擬人化ポケモンの世界に転生

【Nコード】

N7737V

【作者名】

学校嫌い

【あらすじ】

小さい頃、ポケモンが好きだったが成長するにつれて興味が無くなっていった高校生の少女、天城ライナは高校の帰宅途中車に轢かれて死んだが、神によってポケモンの世界に転生した。だが、その世界はポケモンが擬人化した世界だった。

単に作者がポケモンを擬人化しなくて書く作品です。そういうことに嫌悪感を抱く人や純粋にポケモンの話が読みたい人は読まないことをお勧めします。

キャラクター紹介

ライナ：物語の主人公。 女

日本からの転生者。 下校時に車に轢かれて死んだが神とやらがライナがポケモンのストラップを鞆に付けていたからとポケモンの世界に転生させた。

金髪を腰まで伸ばしているが髪型はその日の気分が変わる。 基本はストレート。

15歳という年齢に対して身長は143?と小柄。 本人は気にしていない。

性格は基本面倒臭がりだが、 ちゃっかり料理などのスキルは持っており、 やるときはやる。

生前、初めて告白されたのが同性だったせいかなそれが当たり前だと思っている、 思いこみの激しい娘。

それはこの世界でも変わらない。

現在はイツシュ地方を旅している。

現段階での手持ち

リヨク（ドダイトス）：男

冷静な性格。 体が丈夫で戦闘では鉄壁の防御を誇る。

旅立ちの時にナナカマドから貰ったナエトル。

緑の髪に緑の瞳。

ちょい悪な感じだがライナのことは信頼している。

進化するにつれて背も伸び、メンバー中では一番高い。

度々ライナに肩車を要求されるので、メンバー内では父親的ポジション兼ツッコミ役。

クローム（ゼクロム）：女

うっかりやな性格。喧嘩が好きでよくリヨクと戦う。

Nとの戦いの際、ダークストーンから目覚めた。

黒髪のパニーテール。瞳は紅。全身を白い服で包んでいるが羽穴がありそこから羽を出している。

当初は黒い服だったがライナがたまには違う服をみたいと思い造った。

ライナのことを心から慕っており危害を加えようとする者は誰でも許さない。

ヒカリ：ライナと一緒に旅をする仲間。 女

ライナが旅に出るまで自分もフタバタウンに残り、ライナが10歳になってから旅に出た為ヒカリの旅立ちは12歳からとなった。

黒髪をライナと同じで基本はストリートにしている。これはライナがそっちの方が好きだと言ったから。

現段階の手持ち

ライズ（ゴウカザル）：男

勇敢な性格。昼寝が好きで何も無いときは基本寝ている。

ヒカリの最初のパートナー。

リヨクとは研究所にいた頃から仲が良く気が合う。

メンバーの中では2番目に背が高い。

赤い髪に赤い瞳。

赤い服の上に白いパーカーを着ている。

毎日律儀にツツコミをするリヨクを見て笑っている。

トキヤ（ディアルガ）：男

穏やかな性格。いつもメンバーを見守っている。

紫色の光を放つ鉱石をペンダントにしている。

槍の柱で戦った時にヒカリの想いに惹かれて仲間になることを決意した。

肩の少し下まである銀髪に青が混じった髪を後ろで一つに纏めている。

季節に関係なく全体的に青いコートで身を包んでいるが本人は暑さなどは気にならない。

身長はライスよりも少し低い位。

ララ（タブンネ）：女

慎重な性格。力自慢で自分の数倍はある大岩でも軽く持ち上げる。

イツシュ地方でヒカリと出会った。

コスプレが趣味でナース服や警官の服などをライナに作ってもらっている。

基本はピンクのナース服。

ピンクの髪に青い瞳。

背はヒカリの手持ちでは2番目に低い。

トウコ：イツシュ地方で加わった新たな仲間。 女

イツシュ地方を旅している最中2人と出会い仲間に加わる。

ポリウムのある茶髪をポニーテールにしてピンクボールマークが入った帽子を被っている。

Nとの戦いの際も2人と力を合わせた。

現段階での手持ち

スイレ（ダイケンキ）：男

大人しい性格。食べるのが好きでメンバー内では一番の食いしん坊トウコの最初のパートナー。

黄色の瞳を持ち、蒼い髪で先端には白髪が混じっている。

いくら食べても太らない為、女性陣からは色々文句を言われて度々困っている。

ミライ（ビクティニ）：女

陽気な性格。スイレン程では無いが食べることが好きな似たもの同士。

オレンジ色の髪を背中まで伸ばしている。青い瞳。

プラズマ団に追い詰められていた所をトウコ達によって助けられて以降、着いてくるようになり暫くして仲間になった。

背は仲間のライナ、ヒカリのメンバーを含め一番小さい。

ワンピースタイプの服を着ている。

プロローグ

あましろ
天城ライナは極々普通の少女で小さい頃は様々な物に興味を示していた。

その中で彼女が一番夢中になったのは『ポケットモンスター』というゲームだった。

だが、成長するにつれて彼女は好きだったことに対して次第に興味を失っていき、高校生になる頃には面倒臭がりな性格も手伝わてか殆どすることに興味を示さなくなり、そんな彼女は生きることさえ面倒だと思ふようになった。

そしてある日の放課後——彼女はこの世を去ることになる。

天城ライナは5階建てのマンション、その3階で1人暮らしをしている。

いつもと同じように起床したライナはもそもそとベッドから起き上がり洗顔と歯磨きを済ませ、長い金髪を整える。

パンを2枚トースターで焼きそれにバターを塗って食べ、食後のコーヒーを飲む。

食べ終わり皿を流しに持って行き洗ってから制服着替え、靴を履き玄関を出て鍵を閉める。

鞆には何となく着けたままにしているピカチュウのキーホルダー。

面倒くさがりだが朝の運動には丁度いいと言うことで毎日階段を使っ
て降りている。

今日もそれは変わらないし学校での生活も変わらない。

学校までの道を歩くこと約20分。

周りの生徒と同じように昇降口に行き靴を脱いで上履きに履き替える。

階段を上って自分のクラスである2年C組の扉を開いて中に入り軽く挨拶をしながら窓際一番後ろにある席に着く。

何もせずに外を眺め教師が来たら授業開始。

いつもと変わらない生活。

そんな中ライナは誰にも聞こえない声で呟いた。

「面倒くさいな・・・」

これは彼女の口癖。

クラスの皆も彼女の性格を十分に把握しており例え聞こえたとしても誰も何も言わない。

その気持ちのまま1日を過ごし放課後になればすぐに帰宅する。

そしてパンが切れたことを思い出しコンビニに寄ろうといつもの違う道を通り、同じ道にあるゲーム屋をなんとはなしに見た。

そこには発売中のポケモンのソフトのポスターが貼られていた。

「『ポケットモンスター ブラック・ホワイト』か・・・また色に戻ったんだ？」

そつえばもう随分とやってないな。今はどれ位のポケモンがいるんだろ？」

別にもういいか、そう言って彼女は目的のコンビニに向かった。

パンを買って今度はマンションに戻ろうといつもの道に戻る。

交差点に差し掛かった時、丁度信号が青になった。

ラッキーと思いそのまま横断歩道を歩こうと足を踏み出す。

ブー！ブー！

クラクションの音に振り向けば勢いを止めること無く走って来る一台の車。

「——え？」

次の瞬間ライナの意識は闇に飲まれた。

「ん・・・あれ？わたし、車に轢かれたんじゃ？」

ライナは目を覚まして自分がどうなったのかを思い出しながらそう呟いた。

そして周りを見渡すと白以外の色が存在しない空間にいた。

他に何も無いのか、ともう一度よく見てみると目の前の空間が途端に歪み始めた。

そこから出てきた人は光で包まれていて輪郭しか分からなかったが、おそらく女性だろう。

その女性はライナを見ると口を開いた。

「娘よ。汝にはもう一度生をやり直してもらいたい・・・」

「唐突になんなの？そもそもどうしてわたしはここに連れてこられたの？」

ライナには自分が連れてこられた理由が分からなかった。

「汝はその性格故にいきることまでも面倒だと思っ様になってしまった。」

妾はそれが悲しいのだ」

「だから何？わたしがどう生きようと貴女には関係ないでしょ？」

「確かにそうだ。だが、生きるとは楽しいということをや汝に知ってもらいたいのだ。」

真に勝手だが、汝を別の世界へ転生させる。

そこで、第2の人生を送ってくれ」

ライナは何も言わなかった。

聞くことすら面倒なのだろう。

女性に顔を向けては居るがその瞳には何も映してはいなかった。

女性はそんなライナの瞳を見て悲しくなった。

（だからこそ、次の世界では楽しい生活をおくって欲しい・・・彼女が生きることを楽しいと思得るような存在に出会って欲しい）

胸の内でそう願ひライナを転生させる準備を始める。

「汝はポケモンのキーホルダーを着けているな？」

今からその世界へと汝を送る・・・よいか？」

「どうせ、わたしの意思は関係ないでしょ？」

それなら早くして・・・」

「・・・・・・・・ゆくぞ？」

そう言うとライナの体を淡い光が包み始めた。

「あ、そうだ。あんた何なの？」

「・・・・・・・・この世界の神だ」

その言葉に疑問を感じる前にライナは再び意識を失い、光に包まれ
新たな世界へと飛んでいった。

「生きることは・・・・楽しいぞ？ライナ」

誰もいない空間で神はポツリと呟いた。

ある日の午後、フタバタウンに新たな生命が生まれた。

元気な産声を上げた赤子を父と母は喜びの涙を流しながら迎え、近所付き合いのある親子の子どもである黒髪の少女も、その子の誕生を喜んだ。

その子は『ライナ』と名付けられ両親と1人の女の子に暖かく見守られながら成長していった。

そして、10年の時が流れた。

ある日の朝、下から騒がしい音が聞こえライナは半分目を覚ました。続いてドタバタと階段を上がる音が聞こえ扉が乱暴に開け放たれ黒髪の少女が入ってくる。

「ライナ！起きて！今日は旅に出る日なんだよ！」

「うん……まだ、眠い……」

「もう！駄目だつてば！そんなライナも可愛いけど今は早く起きて！」

研究所に行こう！ライズだって早く旅に出たいんだから！」

そう言うと同時に部屋に1人の人間が入ってきた。

1人は燃えるような赤い髪に赤い瞳。

赤い服の上に白いパーカーを着た長身の青年。

名をライズ。

「全くだ・・・早く起きろよ、ライナ？」

2年間も待ったんだからな？」

「・・・分かったわよ。

起きるから・・・おはよう、ヒカリお姉ちゃん、ライス」

「ライズだ。濁点忘れんな！それだけで食い物になるだろうが？」

「いいじゃないライズ？ほら、取りあえず出ておきましょう？」

「分かったよ・・・」

少女の名はヒカリ。

10年間ライナの側に居りずっと見てきた、姉としてライナは慕っている。

そんなヒカリは既に12歳になっているがライナと共に旅に出たいという思いから、10年間待っていた。

ライナは緑色の薄い長袖と太腿を少しだけ覆う短パンを着て下に降りた。

両親に挨拶をしてヒカリ達も共に朝食を食べ旅支度を調べて研究所に向かう。

ナナカマド博士から初心者用のポケモンであるナエトルを貰い、『リヨク』と名付けた。

「よろしくね？リヨク」

「うん。よろしくね？ライナ」

それから2年間2人はシンオウ地方を旅して回った。

様々なことがあり、ライナはトレーナーとして格段に成長した。

ヒカリもその旅の中で時間を司る『神』と呼ばれしポケモン、ディアルガを仲間に加え『トキヤ』と名付けた。

シンオウリーグでの優勝は逃してしまったが、四天王とチャンピオンはライナに何かを感じ取った。

それはこれまで戦ってきたジムリーダーも同じだった。

それから1年。ライナとヒカリは四天王、そしてチャンピオン、シロナの元で修行した。

「それじゃ、気を付けてね？」

「はい！お世話になりました！」

「いいですよ。貴女方と過ごしたこの一年・・・とても充実していました」

「ああ。バトルの腕も格段に上がったからな。楽しかったぜ？」

「そうだね？ボクも毎日楽しかったよ」

「本当にね・・・これから頑張るんだよ？」

シロナ、ゴヨウ、オーバ、リョウ、キクノ。

チャンピオンと四天王に見送られ2人は新たな旅に向かった。

次の目的地は『イツシュ地方』。

そして、イッシュ地方での旅の最中2人は『トウコ』と言う新米トレーナーと出会い友好な関係を築いた。

暫くして『N』と名乗る青年に出会い、1年後、彼率いるプラズマ団と戦い見事勝利に終わった。

ライナはNとの戦いの際、『ゼクロム』と言う『レシラム』と対を成すポケモンに認められ仲間となった彼女に『クローム』と名付けた。

その後、Nは何処かへと去ってしまいそれから1年会うことは無かった。

サザナミタウンの浜辺で2人の少女が話をしている。

1人は黒髪をまっすぐ伸ばし、この5年間で大人びた少女。

1人は茶髪の少女。

「あれから、もう1年か・・・早いな」

「そうね。N、何処に行っちゃったのかな？」

「さあ？そのうちひょっこり戻ってくるんじゃない？」

そして、もう1人。

「2人とも、ご飯できたよ！」

金髪の少女。

「「はい！」」

これは、平和を取り戻したイッシュ地方での物語。

穏やかに

サザナミタウン。イツシュ四天王であるカトレアの別荘をライナ達は使っている。今ではこの3人にとっても家の様な物になっており、自由に使っている。

そして、今は晩ご飯の途中。

しかし、元気の無い少女が1人。

「どうしたの、トウコ？」

そんな少女に問いかける金髪の小柄な女の子の名はライナ。
この物語の主人公である。

5年間の旅を通してトレーナーとしての腕は格段に上がったが、身長や女性的な所はいまいち成長していない。

そんな彼女はもう15歳。

小柄な為初対面の人はず彼女を15歳とは思わないだろう。

「ちょっとね・・・Nが気になるみたい。彼が旅に出て1年が経ったでしょ？」

今頃どうしてるのかな・・・って」

トウコに代わって説明したのは5年間片時も離れることなく共に旅をして共に成長した黒髪の少女の名はヒカリ。

ライナと血縁関係は無いがライナが生まれた時から近くに居り姉の様に生活し、ライナもヒカリを実の姉の様に慕っている。

ヒカリは旅立ちが12歳からとなつた為、今は17歳。女性としてもトレーナーとしても立派に成長した。

「だって・・・連絡を取る手段が無いからどうにも出来ないし、探しに行こうにもどこに行つたのか分からないしで・・・どうにもできないんだよ」

いつもは活発だが今はあまり元気が無い少女の名はトウコ。

ここ、イツシュ地方でライナ達と出会い、共に旅をしてきた18歳の少女。

余り見えないが一応3人の中では年長者である。

そんな彼女も出会つた頃に比べると格段に成長し、イツシュリーグでは優勝まで勝ち取つた。

3人の中では一番女性らしく成長した者だ。

「ん・・・まあ、気にしても仕方ないと思うよ？

Nって基本自由人だからいつの間にかこっちに戻ってる・・・なんてこともあるかも知れないし」

「あたしもそう言つただけだね？」

「だって・・・もう！どうして止める間も無く行っちゃうかな！あいつは！

今度会つたら一発は殴つてやる！」

「お前に殴られたら大抵の奴は沈むつての・・・」

ばやいたのはライナの最初のパートナーであるリョク。

ナエトルの頃は大人しかつたのだが、進化するにつれてどこかで間違ってしまったのか不良のようになってた。

それでも根は優しいと言うことを皆が知っているので、誰もそのことは気にしていない。

そんな彼は父親兼ツツコミ役である。

さて、彼の言った通りトウコの一撃は例えポケモンが受けたとしても耐えられるのは耐性がある仲間くらいだろう？

ヒカリのパートナーであるライズとよく組み手をする為、そこまで強くなる必要があるのか？という程に鍛えられた。

ライズ自信も楽しんでたためついやり過ぎてしまったのだが、気付いた時は既に手遅れと言うか、そんな状況になっていた。

「全くだ。俺でさえ今では危ねえんだぜ？

Nみたいなほつそい奴が喰らったら間違いなく2時間は気絶する」

リョクに同意を示したのは上記でも説明したヒカリのパートナー、ライズ。

だが、修行を付けたのは彼の為その場にいつ誰もが『あんたが言うか？』と思っただけは言うまでも無い。

「お前が言っただけの」

というか言っている者が約一名。ツツコミ役のリョクである。

「大体トウコは人間なんだから、そこまで強くならなくても良かっただろう？

それをお前は、ポケモンバトルが飽きたからって好き放題やりやがって・・・」

「んだよ、なんか文句あんのか？仕方ねえだろ！

俺に勝てるやつなんて殆どいねんだからよ！」

「だからって、トウコ自信を強くさせてどうするんだよ！
今じゃ、岩も砕くんぞ！」

「いいじゃねえか！悪漢にも対抗できるんだからよ！」

その後もギャーギャー！とあーだこーだ言いながら次第に激しくな
っていく。

ライナ達はまた始まると察知してご飯を持って隅の方へ行き、小
さな台にご飯をのせてまた食べ始めた。

「だー！口じゃ埒があかねえ！表出る！」

「臨む所だ！負けて吠え面かくんじゃねえぞ！」

バン！と扉を粉碎せんばかりの力で開き外に出た途端にそれぞれ技
を出し始める。

ライナは静かに立ち上がり、その扉を閉めて鍵を閉めた。

「さて、これで少しは静かになった」

「はぁ・・・」

台に戻るとため息をつく少女が1人。

「どうしたの、クローム？」

名はクローム。

Nとの戦いの際ダークストーンから目覚めライナを認め以降仲間となった、黒髪をポニーテールにした少女。

出会った当初は全身を黒い服を着ていたが今は正反対の白い服を着ている。

これはライナが『たまには違う服が見たい』と言ったからだが、他の服などずっと眠っていたクロームに取ってはある訳も無くライナが作った物だ。

今は彼女のお気に入りだ。

「いつも飽きないわよね？あの2人・・・ライナが巻き込まれでもしたらどうするのよ」

「心配してくれるの？ありがとう、クローム！」

満面の笑みで言って抱きつくライナ。

「わ！ち、ちよつとライナ・・・もう、危ないわよ？

ご飯中なんだから」

「だって、嬉しかったんだもん！

・・・クロームあったかい」

「ライナもあったかいよ？」

持っていた食器を置いてライナを優しく抱き締めるクローム。

彼女は照れ屋で今も顔は赤いがとても嬉しそうにしている。

こんな光景もすっかり見慣れた物でヒカリ達はそんな2人を優しい目で見つめている反面、焼き餅を妬いていた。

それには今のライナは気付いていない。

そして数分が経つと――

「すう・・・すう・・・うん・・・」

ライナは眠ってしまった。

年齢こそ15歳だが、体の小さなライナにそれだけ1日の疲れが溜まりやすいのか、夜は余り遅くまで起きていることは出来ない。

そんなライナの頭をクロームは優しく撫でる。

ヒカリとトウコも静かに2人に近づき起こさないようにそつと頬や額を撫でた。

そうすることでライナは安らかに眠ることが出来ることを知っているからだ。

その光景をトキヤ達も優しく見守っていた。

愛される少女

ライナが目を覚ますと既に夜が明けていた。

リヨクとライズは外に閉めだしたままだが、クローム以外はボールに戻っていた。

そのクロームはライナの後ろから抱きついて寝ていた為、ライナは最初身動きが取れずに居たが理由を理解するとクロームが目覚ますまで待つことにした。

この家はカトレアの別荘なため大きさはかなりの物であり、ベッドは余裕で3人が寝ることが出来る広さがある。

ライナはベッドの右端で寝ており後ろにはクローム。

その後ろにヒカリとトウコが寝ている。

クローム達は入浴も済ませたので寝間着だがライナは昨日の服のままであることと、寝汗も多少？いて居るため早く入浴したいと思っているが、クロームが起きなければそれも出来ない。

ライナは仕方なくもう一度寝ようと思い、目を閉じた時腰に回されていた手が動いた。

その手に小さな手が触れたのを感じ、クロームは目を開いた。

ライナは腕の中で体をクロームに向けて言った。

「おはよう、クローム。髪が口に入ってるよ？」

ライナは髪を避けて耳に掛けてあげた。

その行為を嬉しく感じ、クロームは微笑みながらライナに言った。

「おはよう、ライナ。よく眠れた？」

昨日お風呂入ってなかったでしょ？すぐに入る？」

「そんな一気に質問しないでよ・・・。

うん、よく眠れたよ？お風呂はすぐに入りたいな」

「それなら一緒にはいる？昨日はいつもより早かったからライナ分が足りなくて・・・」

「あはは・・・何それ？」

・・・でも、お湯が冷たくなってるんじゃない？

風邪引いちゃうよ？」

ライナの言う通り、昨日から湯を張ったままなら今頃お湯は水になっているだろう。

つまり今からまた湯を張り直さなければならない。

「うん。それは困るからお風呂の前に朝ご飯食べよう？」

ライナだってお腹が減ってるんじゃない？」

その言葉に反応するようにライナのお腹が『くうくう・・・』と可愛い音を立てた。

クロームと少し前から起きていた2人はその音を聞いて少し身悶えした後クロームは――

「もう、ライナってば可愛い！！」「むきゅー！」お腹減ってたんだね？すぐに作るから待っててね？」

力いっぱい抱き締めた後ベッドから飛び出しお風呂の準備をして冷蔵庫から材料を取り出し、意気揚々と調理を始める。

それを見てライナは優しく微笑み起きている2人に挨拶をした。

ピクリと肩を揺らした後、最初にヒカリが起き上がり挨拶をした。

トウコもそれに続き挨拶をする。

「2人とも聞こえた？わたしのお腹の音／＼」

「聞こえた。でもそこで赤らむライナ、可愛い！」

「きゃ！もういきなり抱きついて来ないでよ・・・」

それにわたし昨日お風呂入る前に寝たから、少し汗臭いよ？」

「そんなこと無いわよ？ライナはいつだって綺麗なんだから」

「ヒカリの言う通りだよ？ライナ綺麗だし、この先だって誰にも汚させたりなんかしない。

そんなことしようとした奴は誰だろうと殴り飛ばすから安心して？」

「・・・うん、ありがとう。

ヒカリお姉ちゃん、トウコ」

3人は微笑み合いお互いを優しく抱き締めた。

そして、お腹を空かせているライナの為に手早く出来るオムレツを作り、出来たことを知らせようとベッドを見ると、その光景が目に

入り自分もすぐにそれに加わった。

朝から元気な娘たちである。

朝食は先ずはライナの分を優先したので食べること自体はライナ1人となったが、周りにはクローム、ヒカリ、トウゴ。

そして、トキヤ達も居り、寂しさを感じることも無くライナは食事を進めていた。

ちなみに誰もリヨクたちのことを思い出していない為、ここに2人の姿は無い。

中々に薄情である。

「それにしても、ライナ。

お主は確かにトレーナーとしては成長したが、女性としてはいまいち成長しておらぬな？」

「そうだね・・・ヒカリ達とはこっちからの付き合いだけど、会った時から変わっていないし」

「分かるわ・・・俺もミジュマルの頃に2人とあっただけどよ？その時はもっと幼いかと思っただぜ」

「でも、小柄だから可愛いよね？もう、ちょっとした仕草がこう・・・キュンと来て！

守りたくなるもん！」

『それはホントに分かるわ……』

トキヤとライナを除く全員が同意した。

ちなみに上からトキヤ、ララ、スイレン、ミライである。

「分かるけどね、トキヤ？」

「む、何だ？」

「女の子に向かって女性としてはまいち、なんて言うのはどうかと思うわよ？」

ライナはその辺り自覚が無いから余り気にはしないみたいだけど……」

「確かにそうだな……済まぬ、ライナ。失礼なことを言ってしまった」

ヒカリに注意を受けたトキヤは深く頭を下げた。

「別にいいよ。トキヤだって悪気があって言ったことじゃ無いのは分かっているから。」

ヒカリオ姉ちゃんが言った通り余り気にもしてないから、顔あげて？」

その言葉にトキヤが顔を上げるとライナは箸を置いてトキヤに近寄り頭を撫で始めた。

トキヤは何故ライナがそうするのか分からず、暫し沈黙していたがはっとなり尋ねた。

「ライナ？一体何をしているのだ？」

「う？えへへ・・・わたしが落ち込んだ時なんかにはカリお姉ちゃんがかうしてくれると元気になるんだよ？」

「だから、トキヤも元気になるかな？って思ってた・・・元気、出た？」

「ライナ・・・うむ、元気になったぞ？ありがとう、ライナ」

「良かった！」

面々の笑みで言う彼女にその場に居た者は皆胸が高鳴るのを感じた。

皆今の様に無邪気に笑うライナが好きなのだ。

勿論リヨクとライズも・・・。

ライナはまた元の場にちよこんと座りオムレツを幸せそうに頬張り始める。

そして、そんなライナを皆は夕べと同じように暖かな眼差しで見守っていた。

余談だが、リヨクとライズは入浴なども済ませたライナが海で遊びたいと言い、準備を済ませて皆で外に出た時に2人の存在を思い出し、やっと入ることが出来た。

譲らない思い

翌日の夕方、ポケモンセンターで有る人物と連絡を取っていたライナは、その人物が近い内にこちらに来ることを聞き、それをすぐにヒカリ達に伝えた。

ライナとヒカリ、そして、リョク、ライズ、トキヤは喜んだがトウコとイツシュの面々はその人物のことを話でしか聞いていないため、どのような人なのかと言う方向に興味が向いていた。

それから4日が経ったある日の午後。

サザナミタウンに1人の女性と1人の青年が到着した。

女性は長い金髪に独特な髪留めをしており、服は黒を基調としたコートに長ズボン。

青年は青いパーカーに黒のズボン、そして黒髪に黒でボールの模様が入った帽子を被っている。
年齢はトウコと同じ18歳。

そして、そんな2人を迎えに走ってくる小さな金髪の女の子。

「あ、シロナさん！」

「ライナちゃん！久しぶり、元気だった？」

「はい！それで、そちらの人は？
知り合いですか？」

そう言っただけでライナは隣に居る青年を見上げた。

「ええ、ここに来る途中で会ったんだけどね？
どうも、方向音痴みたいで・・・どうせだからここまで連れてこようかなって」

「こんにちは。オレはトウヤ、よろしくね？ライナちゃん」

「うん。よろしくね？トウヤ」

「トウヤくん、一応言っておくけど彼女は15歳。
立派な女の子よ？」

「え！こんなに小さいのに・・・？」

「そうだよ。トウヤはトウコと同じくらいに見えるから・・・17
歳くらい？」

「ああ、18歳だよ？でも、そのトウコって？」

「あ、そうだった・・・ヒカリお姉ちゃんもトウコも楽しみにして
るから、シロナさん早く来て？」

トウヤもいこ？みんな、楽しい人たちだよ？」

子どもの様にシロナの手を引っ張りながらトウヤにもそう言って、
3人は別荘へと向かった。

中に入るとヒカリがシロナに駆け寄り挨拶をしてイッシュで出会った新たな仲間である、ララとトウコ達を紹介した。

そのトウコだが、シロナでは無く隣のトウヤを見て驚いた顔をしていた。

それはトウヤも同じ様で揃って声を上げた。

「トウヤ（コ）！？」「」

「あれ、2人は知り合いなの？」

ヒカリの問いにトウコが先に答えた。

「うん。小さい頃から一緒に遊んでたんだけど・・・」

「オレがジョウトに引越すことになってそれっきり・・・」

「こんなところであえるとはね」

「そうだな。まあ、久しぶり」

「ホントだね・・・」

「2人とも、取りあえず座ろう？クローム、お茶の準備手伝って？」

「ええ、紅茶にするの？」

「そうだけど、何がいい？」

「ミルクティー。砂糖多めで」

いつもと同じ要望に小さく笑い皆の要望を聞きヒカリ、トウコ、シロナはストレートティー。

トウヤ、リヨク、トキヤはアップルティー。

ライズ、ララ、ミライ、スイレンはレモンティー。

ライナ、クロームはミルクティーとなった。

トウヤとシロナのポケモンだが、いくらこの別荘が広いと言っても窮屈になってしまうので後に外で紹介することになった。

お茶と菓子を準備して机に持って行き一口飲んでトウコがジョウトのことを聞き始めた。

シロナとトウヤがいいの面々はジョウトに行ったことが無いので興味津々である。

トウヤはジョウトで会ったトレーナーのことやロケット団と言う団体が居たこと、ルギアやホウトウと言ったジョウト地方に伝わる伝説のポケモンのこと、ハウオウが人間との争いで命を落とした、エンテイ、スイクン、ライコウを蘇らせたこと、そして、その内の1人であるエンテイと共にジョウトを回ったことを・・・。

これにはライナ以外の全員が驚愕の色を隠せなかった。

ライナが驚かないのはポケモンに姿形、名前による違いがあるのと、皆同じポケモンだと思っているので伝説や幻として伝えられるポケモンと共に居るトレーナーがいても可笑しくないと思っている。

だからこそ、ライナはクロームにも認められ皆からも愛されるのだろつ。

人もポケモンも特別視をして欲しくない者は少なからず存在する。

そして自分を？普通？として受け入れてくれる者を求めるがそんな存在は中々いないこともその者達は分かっている。
だが、例えどんなポケモンであろうとライナは等しく受け入れる。

トキヤがヒカリについて行くことを決めた理由もこの中に有るのだが、それはまたの機会に話すとしよう。

「ライナちゃん、驚かないの？」

皆と違い、大きな反応をしないライナにシロナが聞いたがライナはそれに質問で返した。

「どうして？エンテイが伝説のポケモンだからって、驚く必要は無いでしょ？」

それにクロームやトキヤだって伝説のポケモンだけど、みんなと何も変わらないんだよ？」

「では我は特別ではないとも言いたいのか？娘よ」

どこからともなく聞こえた声と共にトウヤが腰に着けているボールから灼熱の気を纏い、ジョウト地方に伝わる伝説のポケモンエンテイが姿を現した。

ライズ以上に燃え盛るような赤い髪に瞳も持った男性。

首元に白い毛皮の着いた赤いコートと腕には黒い腕輪と着けている。

だが、当のライナはその質問に答えるよりも前に

「あ、こんなところでそんなに燃えないですよ！この別荘カトレアさんの何だから！

はい、取りあえず外に出て！」

全く別のことを気にしていた。

これには長年の付き合いでヒカリは勿論、トウコ達、何よりもエンティが驚いていた。

「な・・・それよ「良いから早く出なさい！」・・・うむ」

エンティを無理矢理外に出して話の続きを聞く。

「それで、何か聞きたいことがあるの？」

「・・・そなたは我が特別ではないと言いたいのか？」

「はい？」

「だから！そなたは我を特別扱いしないのか？と聞いている」

エンティのその質問にライナはため息しか出なかった。

「どうしたあなたを特別扱いするの？」

みんな同じポケモンなんだよ？そんなことする意味が分からないもん・・・それに」

「それに・・・何だと言うのだ？」

「さっきも言ったけど、クロームもトキヤもあなたと同じように伝説として伝えられてる。

けど、それは昔の人が勝手にそうしただけ・・・それ以外は何も変わらない1人のポケモンだよ？

もちろんあなたもね？だからわたしはあなた達を特別だとは思わない。

そう思うことが失礼かもしれないとは思うけど、わたしはこれは譲らないよ？」

それを聞いてエンティはトウヤに会う前のことを思い出した――

ライナ・クローム対エンティ Part 1

ジョウト各地を歩いていれば、必ずどこかでトレーナーに遭遇する。

だが、エンティは誰が来ようとすぐにその場を離れた。

次第に、？遭遇してもすぐにどこかに行ってしまう？という情報はトレーナーの間で流れるようになった。

そんな事態を見越してエンティが逃げられないよう黒い眼差しや影踏みなどを使って執拗に戦いを挑んで来る者が多くなった。

そうなったらエンティも戦わない訳にはいかない。攻撃させる暇も与えず倒してその場を去る。

トウヤに会うまでの長い間、エンティはそうして過ごしてきた。

最初はトウヤもエンティを普通のポケモンだと思っていた。

だが、エンジュシティでホウオウと3体の伝説を聞き仲間になりたいと思い、追い始めた。

そしてエンティは今トウヤの手持ちとして、共に行動している。

バトルの時、エンティは殆ど戦いの場に出ること無い。

相手が余程強ければ別だが、仮にもトウヤはジョウトのジムは制覇している実力者である。

その辺のトレーナーに負けることはまずあり得ない。

だが、それは同時にエンティはただボールに入っているだけと言うこともある。

こちらに来てからもそれは変わらなかった。

そして、今日エンティはライナと出会うこととなった。

ライナが言ったことはエンティは勿論彼の手持ち、その場に居る皆が聞いて居り、エンティはライナにボールから問いかけで姿を現したが、ライナの反応は全く予想外のことだった。

まさか怒られるとは思っていなかっただろう・・・。

半ば無理矢理外に出されもう一度問いかければ返ってきた答えとライナのポケモンに対する想い。

「我は？普通？なのか？お主にとって・・・」

「だからそう言ってるでしょ？何も変わらない。
聞きたいことはそれだけ？」

「ああ・・・それだけだ」

エンティは満足げに笑った。

「それじゃ、戻ろう？」

「いや、少し待ってくれ。聞きたいことは終わったが頼みを聞いて欲しい」

「頼み？」

「ああ——」

「審判はあたし、ヒカリが務めます。

ですが今回はエンテイの要望の為ライナはクロームと戦うこと！
そして、エンテイは自分だけで戦います！異論は有りますか？」

「「ないわ」」

「否」

「それでは、時間無制限！ライナ、クローム対エンテイ！初め！」

エンテイの頼みとはライナ、クロームと戦いというものだった。

断る理由が無いライナはクロームに話し、聞いたクロームは挑戦を受けた。

だが、バトル方法は今までのものとは違いエンテイは自分だけで戦う
と言って聞かなかった。

トレーナーであるトウヤでさえそれには逆らえず大人しく引き下が
った。

「行くよ、クローム！ドラゴンクロー！」

「ハアアア！」

力を爪に集約しエンティに向け振り下ろすが悉く躲され砂煙を巻き上げる結果に終わり背後に回り込んだエンティは火炎放射の発射態勢に入る。

このままでは間違いなく当たってしまうだろう。

「回し蹴り！」

「ハッ！」

「な！ぐっ！」

ズガン！

何とか受け止めるが予想していなかった攻撃に十分な防御態勢が取れず数メートル地面を抉ったが何とか踏みとどまった。

エンティは驚きを隠せなかった。

今クロームが放ったのは？ただ？の回し蹴り。

だが、それだけで防御が十分では無かったとは言え数メートル地を抉ることになったのだ。

？女？であるクロームの蹴り、しかも踏ん張りが利かない砂地で放った蹴りによって・・・。

「どうやら認識を改めなければならないようだ・・・」

エンテイは本気で2人を倒すと決めた。

ライナ・クローム対エンテイ Part 2

——ゴオオオオオ!

「本気で行くぞ?ライナ、クローム」

そう言ったエンテイは先ほどとは比べものにならない炎を放ち始めた。

さすがは伝説のポケモンと伝えられるだけはある、その炎は周辺の砂はおろか海水までも蒸発してまった。

距離があつた為ほんの僅かで済んだが・・・。

「クローム、こつちも本気でいくよ?」

「ええ。サポート、お願いね?」

「もちろん」

「ふう・・・ハッ!」

——バチバチ!バチチチチ!

エンテイが放つ炎とクロームから迸る青い稲妻。

暫くの間この場に聞こえるの炎と稲妻の音だけだった。

「クロスサンダー！」

「ハアアアア！」

唐突に静寂は破ったのはライナの声と更に凄まじい電気を身に纏ったクロームの叫び。

翼を使い更に凄まじい電気を身に纏いながらエンテイに向かっていく。

「ウオオオオオ！」

エンテイもそれに応えるかの様に強大な炎を纏いながらクロームに向かっていき中央で2人がぶつかり合い大きな爆発が起きた。

ドゴオオオオン！

「一旦距離を取ってから、クロスサンダーを纏ったまま飛んで！いつ来るか分からないからね！？」

煙が晴れる前に指示を出し、その後すぐに煙の中に青いヒカリが見え羽ばたく音と共にクロームが姿を現した。

クロームには怪我は見あたらないが彼女の来ていた服は所々が焦げてしまいスカートは際どい所まで燃えてしまっていた。

流石にエンテイの炎が相手では無事では済まないがクロームはそのことを心底嘆いていた。

「ライナ……服が……」

「情けない声出さないの！後でちゃんと直すから今は戦いに集中！来たよ！」

「わっ！」

バチ！

迫って来た炎が纏っていた雷に当たり次はエンティが跳んできた。

「成る程。ただ待つだけでは無く攻撃用の技を防御に使っていたか・
・だが、それだけでは私の攻撃を防ぐことはできんぞ！」

そういつてエンティはその脚力を活かした蹴りをクロームが纏っていた雷に放った。

「エネルギーチャージ！」

「OK！」

防御でもなく攻撃でもなく溜めることを指示するライナと何の疑いも無くそれに従い電気を溜め始めるクローム。

エンティは攻撃をしながらもこの2人の絆の深さを賞賛していた。

次の瞬間蹴りが雷に当たりクロームが落下していく。

爆発を起こしながら地に激突したクロームを見ながらエンティはこの次に来るであろう攻撃に備える為その場所を落下する間見つめていた。

そして地に降り立っても警戒を続けていたがいつまで経ってもライナ達は攻撃を仕掛けてこなかった。

このことにはエンティだけで無く審判であるヒカリ。
見ていたトウコ、トウヤ、シロナとライズ達も疑問を感じずには居
られなかったが、ライナの最初のパートナーであるリョクだけはこ
れから2人が何をしようとしているのか理解できた。

そして、爆発によって生じた砂煙が収まった時、クロームが落下し
た場所にクロームは居なかった。

「何だと！」

驚愕の声を上げるエンティ。

「いつけー！ー！クローム！雷撃！」

『ハアアアア・・・』

ゴゴゴゴゴゴゴ・・・。

クロームの声が聞こえると同時にまるで地震でも起きているかの様
に震え出す地面を見てエンティはやっとクロームが下に居たことが
分かった。

次の瞬間。

『喰らえー！ー！ー！ー！』

ズガアアアア！

「ぐ、グアアアアアア！」

これまでの攻撃など本気では無かったと思わせる程の大きな雷がエンテイの体を包み込んだ。

そして、攻撃が収まると、下からクロームが出てきた。

「ぷはっ・・・ふう」

「お疲れ様、クローム。ほら、あと少しだよ？」

「うん。よいしょっと」

出てきたクロームは服に付いた砂を叩きエンテイを見据える。

あれだけの威力の雷を受けながらもエンテイは未だそこの佇んでいた。

「・・・凄まじいな？これほどとは思わなかった」

「ライナはすごいでしょ？さ、決着を着けよう？」

「・・・いや、私の負けだ。もう、戦う・・・力、は、残って・・・いな・・・い」

ドサ。

そう言うと同時に倒れ伏すエンテイ。

だが、その表情は清々しいものだった。

一瞬の静寂。

「エンテイ！戦闘不能！よって勝者！ライナ・クローム！」

そしてヒカリの声によってこの勝負は幕を閉じた。

それを聞くとライナとクロームはすぐにエンテイに駆け寄り体を2人で支えて別荘に運んでいった。

皆もそんな2人を見てすぐに後を追う家に入る。

眠っているエンテイのコートを脱がせ砂などによって汚れてしまった顔や腕、足などを濡らしたタオルで綺麗に拭いていく。

「トウコ、最高温度で湯を張っておいてくれ」

「分かった」

「ヒカリとシロナは飯を頼む」

「うん」

「ええ」

エンテイの介護をする2人に変わりリョクがそれぞれに指示を出した。

「たく・・・ホントに優しい奴だよな？俺の主人は・・・」

エンテイの決意

クロームの怒り

エンテイはあれから夜まで眠っていた。

これまで本気で戦ったことが無かったエンテイにとって今日の戦いは予想以上に疲れが出る物だったようだ。

「・・・ここは？」

「目が覚めた？」

声のした方に顔を向けるとそこには月明かりに輝く金髪を持つ小さな少女、ライナがいた。

昼間とは違い、今は首元辺りで一つに束ねた髪を左肩から下に提げている。

ベッドはエンテイの為に使っているため、ライナは椅子を近くに持ってきており、クローム達は床に布団を敷いて眠っていた。

「すまない、お前達の寝床を占領してしまった」

「いいよ、そんなこと。」

それより、体はもう大丈夫なの？昼からずっと眠ってたんだよ？」

「みたいだな・・・何、心配は無い。」

いままで本気を出したことが無かったから・・・疲れただけさ」

「そっか・・・」

「・・・」

「・・・・・・・・」

お互いに何も言わない。

だが、2人に取ってこの時間は決して悪い気がする物では無かった。

ライナは窓から空を見える月を見上げた。

その光は優しく降り注ぎ2人を包み込む。

「外に行こうか？」

「・・・・ああ、そうだな」

2人は誰も起こさないように静かに家を出た。

並んで浜辺に座り今度は直に月を見上げる。

季節はもうすぐ秋が終わり、冬が到来しようとしている。

時折吹き付ける風がライナの体から体温を奪っていき、身震いをするライナをエンティはそっと抱き抱えて膝に乗せ、コートを広げライナを包み込んだ。

クロームやヒカリ達が見たらずぐさま突撃してくるだろう。

突然のことに驚いたライナだがエンティの温かさを感じ身を預ける。

「・・・温かい・・・優しいね？貴方は」

「優しい？我が？」

今度はエンティが驚いた。

そんなことを人間から言われたのは初めてだから尚更なのだろう。

「うん。リヨクやクローム達とは違う温かさ・・・でも、みんなと同じようにとても優しい」

「・・・そうか。それは何よりだ。」

「・・・ライナ、少し話を聞いてくれないか？」

「いいよ？」

即座に返事をしたライナにエンティはもう驚いたりしなかった。
この短時間でもライナという人間を知るには十分だったのだ。

「我は今、トウヤの手持ちとして共に居るのは知っての通りだが・・・
我はトウヤを心から認めた訳ではない」

「・・・うん・・・何となくそんな気はしてた」

「・・・我は疲れていたのだ。」

トレーナーに出会えばすぐさま割れを捕らえようと戦いを挑まれる。

その戦いから離脱したとしても、その先にはまたトレーナーが居る。

そんな日々に・・・そして、5年前にトウヤと出会ったが奴は最初
我のことを知らなかった故か？普通？のポケモンと思われていた。
だが、次に会った時は我等のことを知ったのだろっ・・・戦いを挑
んできた。

それまでと同様我はすぐに離脱した。

だが、トウヤは粘り強く我を追ってきた。

そんな日々が続き、いつしか？いつそのこと誰かの手持ちとしてい
た方が楽では無いのか？？
そう思うようになった。

そして何度目か分からぬがトウヤと遭遇し・・・」

「手持ちになった」

「そうだ・・・だが、結局は何も変わらなかった。
ずっとボールの中から外を見るだけで、出るのは食事の時位しかな
い。

それでも、その時だけは楽しいと感ずることが出来た」

「でも、それもその時だけ・・・外に出ればまたボールの中に戻る。
戦いにも出られない」

「ああ・・・」

そこからはまたお互い何も言わなかった。

数分間風と波の音しかその場には存在しなかった。

「それで、どうするの？」

静寂を破ったのはライナ。

その問いにエンティは――

「くああゝゝ．．．よく寝た」

「おはよう、リヨク。

珍しいね？こんなに早く起きるなんて．．．」

「おう、ライナ。たまには俺だって早起きするさ。それよりも飯が食いたい」

起きて早々朝食を要望するとは余程腹が減っているのだろう。

ライナはすぐにとてとて．．．と音を立てキッチンに向かい冷蔵庫から材料を取り出して調理を始める。

言い忘れて居たが昨日はリヨクはボールに戻らずに眠りに着いた。クロームもそうしようとしていたが戦いの疲れが有るから駄目とライナに言われ渋々ながらボールに戻った。

そしてリヨクは夕べの2人の会話を聞いていた。

だからエンティがこの場に居ないことに付いて何も聞かない。

(あいつが決めたことだからな・・・俺が口出しすることじゃない)

キッチンからは卵とベーコンが焼ける音。

ライナは鼻歌を歌いながら揚々と料理を作っている。

起きてくる皆の分も作っているのでまだ少し時間が掛かるだろう。

カタカタ・・・。

不意に聞こえたボールの音。

それはクロームとトキヤの物だった。

「ライナ、ちょっと外の空気吸ってくるわ・・・すぐに戻ってくるから」

「あ、うん。行つてらっしゃい」

「行つてきます。」

一度こちらを見たライナがまた料理に集中したのを確認して、2人のボールを持って外に向かった。

そして、ゲートを潜り13番道路に出て2人をボールから出した。

トキヤはいつもと変わらない格好だが、クロームは昨日の戦闘によって服が焦げてしまったため、最初の頃の服を着ていた。

「エンティは何処へ行つたのだ？」

トキヤは単刀直入に聞いた。

「あたしにも教えて」

クロームも。

「何で俺に聞くんだ？」

「「勘」」

「そうかい・・・エンティは野生に還つた。
イッシュを回るそうだ」

「どうして？エンティはトウヤを認めて手持ちになつたんじゃないの？」

「確かにな？そうでなければエンティは未だ野生だつたはずだ」

2人の疑問にリョクは昨日ライナ達が離していたことをそのまま話したが、ライナの最後の質問に付いての答えは言わなかった。

出てくるときに置き手紙が会ったのを確認したからだ。

2人は納得して、またボールに戻り別荘に戻った。

リヨクはまたばれないように元の位置にボールを戻した。

数十分後。

皆が起きて後はトウヤだけとなった。

皆は既に着替えて食卓に着いている。

ヒカリ達はエンティがまたボールに戻ったと思っているがライナ、リヨク、クローム、トキヤは既にこの辺りにはいないこと知っていた。

置き手紙はまずは最初にトレーナー？だった？トウヤが見るべきだ
と思い、ライナがポケットに入れている。

「ライナ、今日はなにかするの？」

「ううん。特に何かしようとは思ってないよ？」

ヒカリの問いにライナがそう答えるとヒカリはぱっと顔を輝かせながら言った。

「それじゃ久しぶりにデートしましょ！」

最近、ずっとこの街にいて何処にも行っていないし。ね！」

「うん。いいよ？何処に行くの？」

今日の予定をライナとヒカリが話しているといきなり叫び声が聞こえた。

皆が一斉にそちらを振り向くとそこに居たのはトウヤ。

「どうしたの、トウヤ？叫び声なんか上げて・・・」

「エンテイが居ない！」

『え！』

知っている4人以外が驚きの肥を上げた。

ライナは椅子から降りてトウヤに近づき手紙を差し出した。

「これは？」

「エンテイからトウヤに手紙」

「エンテイから！」

慌てて手紙を受け取りその内容を読み上げていく。

「『我が主人だったトウヤ。

我は野生に戻リイッシュを回ろうと思う。

だが、お主の前に姿を見せることは無いだろう・・・達者でな』」

「エンテイがトウヤの手持ちに加わったのは疲れていたからなの」

「え？」

「エンティは伝説のポケモン。」

そうなれば色んなトレーナーがその力を手に入れようと追いかける。その場から離れてもまたトレーナーが居る・・・そんな日常に」

「だから、俺の手持ちに？」

「うん。でも、今度はひたすらボールの中。」

戦いにも出られず眺めるだけ・・・結局何も変わらなかったってエンティは言ってた」

「そんな・・・折角伝説のポケモンを手に入れたのに」

その言葉にライナは怒りを感じた。

「伝説のポケモンだから何なの？他のポケモンとなにか違うの？エンティが普通のポケモンだったらトウヤはエンティを求めなかったの？」

「そんなの当たり前だろ？伝説のポケモンだからこそ手持ちに欲しいんだ。」

ライナだってそう思うからクロームと居るんだろ？」

「ライナとあんたなんかと一緒にしないで」

「・・・クローム？」

トウヤの問いに答えたのはライナではなくクロームだった。

だが、怒っているのかパチパチと電気を身に纏っている。

「ライナはあたしが認めたから一緒に居るの。」

それにライナは？伝説？とか？幻？なんて関係なくあたし達を見られる。

だからこそあたしは一緒に居るのよ！あんななんと一緒にするな！」

バチ！バチチチチ！

怒りに呼応するように電気が強大な稲妻になっていく。

「クローム」

「っ！ライナ、危ないわよ！」

ライナは電気など構わずにクロームを抱き締めた。

電気を納めよとするクロームだが怒りが大きかったせいか収まるまで少し時間が掛かった。

収まった頃にはライナの手は電気によってやけどを負っていた。

それでも構わずにライナはクロームを抱き締め続ける。

「ありがとう、クローム。わたしの為に怒ってくれて・・・嬉しいか
つたよ？」

「ライナ・・・ごめん、ごめんね？あたしのせいで・・・うわあ
ああああん！」

クロームは泣き崩れてライナも続くように座り込みながらクロームを抱き締め続けた。

やさしく背中を撫でて自分よりも大きな娘が泣きやむのを待つ。

「そんなに気にしないで？わたしの為に怒ってくれただけで本当に嬉しかったんだから。」

早く泣きやんで一緒にご飯食べよ？」

「うん・・・うん・・・グス・・・うう・・・うわああん！」

「もう・・・これじゃ、いつまでも食べられないよ？」

「だつてえ・・・」

「いいよ？もうこの際だから今まで我慢してきた分思いつきり泣いても。」

ごめんね？あたしの力が足りないせいで無理させて来ちゃって・・・

「

「そんなことない！無理なんてしてない！ライナは最高のトレーナーだもん！」

「ふふ・・・ありがとう・・・」

その後もクロームは泣き続けた。

意外な一面

クロームに言われた言葉とライナの行動によって本当に自分と同じ理由でクロームを連れていく訳では無いと言ったことが分かった。

だが、それだけだった。

結局エンティが何故自分の元から離れたのかは理解していなかった。

「う．．．ぐす．．」

「もう良いの？もつと泣いてもいいんだよ？泣きたくても泣けない時があつたでしょ？」

「ぐすん．．．うん．．．」

「ずっと側に居るから．．．全部受け止めるから。ね？リヨクもいいんだよ？」

未だ泣き続けるクロームを抱き締めながらリヨクにも言つと、リヨクは驚いていた。
ヒカリ達もそうだった。

ナエトルの頃に泣いた姿をライナとヒカリは見たことがあつたがハヤシガメに進化してからは一度も見たことが無かつたのだから。

今はある事情があり、リヨクとクローム以外の皆はナナカマドの研

究所に居る。

そこに居るライナとヒカリの手持ちもそれは同じだ。

「ほら、おいで？リヨク、たまには甘えてもいいよ？
わたし達は家族なんだから」

「・・・たく、いつまでも子供扱いするなよな？
お前の方が子供っぽいくせによ？

・・・だが、今日は甘えさせて貰う」

「うん」

少し愚痴ったが結局ライナのことがリヨクは好きなのだ。

それにライナの手持ちの中では最古参である為付き合いも一番長い。

手持ちを除けばそうなるのはヒカリだが・・・。

近くに来てしゃがみ込んだリヨクをクロームの間に自分の頭を入れて腕を精一杯伸ばして2人を抱く。

「リヨクは本当に大きくなったよね？

クロームも少し背が伸びたかな？まったく、みんな揃って母親のわたしを追い越すんだから・・・」

「お前はそのままでもいいんだよ。肩車には丁度良いだろ？」

「ぐす・・・そうだよ？抱きつくのにも丁度いいから全身でライナを感じる事が出来るもん。

ライナは本当に温かいから・・・」

「そうだな・・・久しぶりにこんなに密着したが、確かに温かい。日向ぼっこしてるみたいだ」

「えへへ・・・ありがと。」

「みんなもそんな風に思ってくれてるのかな？」

「「当たり前だろ（でしょ）」」「」

「・・・そつか。久しぶりにみんなに会いに行こうかな？」

「お、いいなそれ！そうしようぜ？」

「そう言えばあたしも他のこっちで会ったみんな以外のメンバーには会ったこと無かったな・・・。」

「ずっと、のんびりしてたから・・・どんな人達なの？」

皆に会いに行くことを考えるライナにリヨクは賛成し、クロームもイッシュ以外のメンバーには会ったことが無い為、興味を示している。

その話題で3人は盛り上がり他の皆は完全に蚊帳の外状態となっていた。

トウヤは他のメンバーを紹介すると言ったことも忘れ立ち上がると簡単に挨拶だけをして別荘を去っていった。

エンティからの手紙を残して・・・。

ヒカリ達は其れを見ていたがライナ達は未ださっきの話題で盛り上がっていた。

そして話が一段落しクロームも、もう涙は止まっていた。

リヨクも久々にライナと触れ合ったことで機嫌が良くなっていた。

「それで、ヒカリお姉ちゃん。今日はどこに行く？」

「え・・・覚えてたの？」

「当たり前だよ。研究所には今度行くから。」

わたしがヒカリお姉ちゃんとの約束を忘れる訳が無いでしょ？」

「ライナ〜〜！」

「きゃ！」

ドサ！

勢いよく抱きついてきたヒカリによって倒れてしまったライナ。

だが、決して嫌がっているのでは無く勢いがあり過ぎたため驚いただけだ。

「痛！」

「え、ライナ！どこか痛いの！」

「もしかしてさっきのあたしの電気で？」

「見せてみる？・・・これなら大丈夫だ。
ちゃんと処置をすれば綺麗になるから、そんな顔をするな？
またライナが悲しむぞ？」

「あ・・・」

「気にしないでいいよ、クローム。何度でも言うよ？
わたしはわたしの為にクロームが怒ってくれて嬉しかった。
だから、何も悪くない。・・・ね？」

「うん。ありがとう、ライナ。
(貴女に出会えて本当に良かった)」

その後、火傷の応急処置をして途中だった朝食を再開したライナ達
だったが、ライナは火傷が痛み箸を上手く握ることが出来なかった。
其れを見てリョクがライナの皿からおかずを取りライナの口元に持
って行った。

「ほら、口開ける？」

「へ・・・リョクってこういうことするんだね？
やっぱりライナが好きなんだ？」

「それはそうでしょうね。
この娘は本当にポケモン達に分け隔て無く接してるから」

「うるせえよ・・・俺だって偶にはするさ。
ほら、ライナ？」

トウコとシロナの言葉にそう返してもう一度言つとライナは微笑みながら礼を言つて口を開けた。

「あゝん・・・あむ。もぐもぐ・・・んく。
うん、今日も良い出来。ありがと、リヨク」

「いいさこれくらい。次は何がいい？」

「えつとね・・・オムレツ」

「はいよ」

それからリヨクはずつとライナに食べさせた。
クロームは自分もしたそうに見ていたが、リヨクのこんな姿を見るのは初めてだったため今回は黙って見ていた。

ヒカリは見るというよりは睨んでいたが・・・。

朝食を食べ終わり片付けはトウコとシロナに頼みライナとヒカリは今日の予定を話し合っていた。

そして、行き先はライモンシティに決まった。

財布と鞆を持って出かける支度をしてリヨク、クロームをボールに戻して、トウコとシロナ、そして2人のメンバーに

「行ってきます」

と言ってライモンシティに向かった。

バーベキューをしよう！

ここはライモンシティ。

今ライナとヒカリはこの街に居る。

理由はもちろん買い物をするためである。

もしかしたら、リョクたちも出番があるかも知れないかも知れない・
・おそらく無いと思われる。

「ライナ、手大丈夫？手当はしておいたけど・・・」

「大丈夫だよ？それに、この怪我はクロームがそれだけわたしのこ
とを大切に思ってくれてるってことだから・・・」

「そっか・・・」

それを聞いていたクロームがボールの中で真っ赤になっていたのは
言うまでも無いことである。

「それじゃ、早速買い物に行こうか？まずはどこに行く？」

「ヒカリお姉ちゃんはどこか行きたい所は無いの？今日は、どこに
でも付き合えるよ？」

「うーん・・・じゃあ、観覧車に乗ろう？まだ、朝だけど、
高い所から見る景色は綺麗だからね？」

「そう言えば、この時間帯に乗るのは初めてだっけ？」

「そうそう。それも含めてさ・・・どう?」

「うん。行こう?」

こうして2人は観覧車に向かった。

観覧車に着くと、そこには人だかりができており、2人も何かがあるのかと、気になり近寄ると中心にカミツレが居た。

ライモンジム・ジムリーダーを務める彼女は同時にモデルとしての人気も高いため、地元に住んでいる人たちと言えど、それはかわらない。

カミツレが居る場所からは身長的な問題も有り、ライナの姿は見えないが、ヒカリは何とか見える位置に居る。

数分が経ち集まっていた人達が散っていき、カミツレはヒカリたちに近づいて声を掛けた。

「久しぶりね?ライナちゃん、ヒカリちゃん。元気だった?」

「はい。元気でしたよ?今日はライナと一緒に買い物に来たんですけど・・・カミツレさんは今日、何かあったんですか?」

「ちょっとね?でも、もう終わったから気にしないでいいわ。所で、買い物って言ってたけど、こっちには自販機しか無いわよ?」

「あ、いえ・・・最初に観覧車に乗りに来たんですよ。この時間帯に観覧車に乗ったことは無かったんで」

「そっか・・・」

そこで、カミツレはライナに目を遣り

「ライナちゃんっ！ん！ん！」

抱きついた。

「むきゅ！」

身長差は大きいため、ライナに取ってその衝撃は大きなものだったが、抱きつかれることが多い彼女に取っては慣れっこである。

実を言うと、ライナは女性ジムリーダー、全員に同じような反応を取られている。

「久しぶりね〜！相変わらず可愛い！」

その時腰のボールからクロームが出てきた。
出番はあったようだ・・・。

「ちょっと、カミツレ！ライナが苦しがつてるでしょ！」

「あら、クローム。そんなこと無いわよ？ちゃんと、加減してるから・・・大切なライナちゃんを苦しめる訳無いでしょ？」

「いいから、離しなさい！」

そう言って飛びかかるクロームをひょいと避けるカミツレ。
ちなみにライナが喋らないのは決して気絶をしているとか、そう言ったことではない。

単に、寝ているだけである。

「あら、ライナちゃん一言も話さないと思ったら寝ちゃったのね？
寝顔も可愛い〜」

ぶにぶにと頬をつつくカミツレ。

寝ているライナを見てクロームも飛びかかるの止め、ゆっくりと近づく。

無論ヒカリも・・・。

「ライナって昔から気を許した人に抱きついたり、抱きつかれたい
するとすぐに寝ちゃうのよね。そういう所は、全く変わってないけ
ど・・・」

「うん・・・それだけ、信頼してくれてるってことが分かるから嬉
しい」

「そうね。私も初めて会った時思わず抱きついちゃったけど・・・
その時は抵抗されてばかりだったなあ・・・」

「初対面の人に抱きつかれたら誰でも抵抗しますよ？大体なんで、
みんないきなりライナに抱きつくんですか？シンオウでも結構大変
だったんですよ？」

「へっ・・・そうだったんだ。でも、ライナって可愛いからね？な
んか分かる」

そう言っただけはクロームがライナの頬をつつく。

それによって少し身動きするライナを見て、3人は頬を緩ませる。

結局ライナはカミツレの腕の中で眠ったまま、4人で観覧車に乗ることになった。

配置は右側の席にヒカリ、左の席にカミツレ（ライナ）、クロームが座っている。

「貴女達は今、サザナミタウンの別荘に住んでるんだっけ？
どう？生活の方は？」

「楽しいですよ？今はシロナさんも居るので・・・」

「え？シロナってシンオウチャンピオンのシロナさん？」

「はい。カミツレさんも時間がある日に来てみませんか？別荘に来たことはまだありませんでしたよね？」

「そうね・・・折角だから、今日にでも行ってみようかな？仕事も暫くは無いし・・・イッシュリーグも来年まで無いし」

「いいですね！行きましようよ！それで、浜辺でバーベキューとかしませんか？」

「楽しいですよ？きつと！」

確かにライナ達のメンバーでバーベキューをすれば楽しいことは間違いないだろう。

だが、問題は取り合いにならないかどうかである。
特にリョクとライズは確実にするであろうが、それ以前にスイレンとミライの食漢コンビが問題であるのだが・・・。

「でも、スイレンが殆ど食べちゃうんじゃない？それにミライも・・・あの2人ってホント、どれだけでも食べるじゃない。バーベキュー

「なんかしたら、それこそどつちか1人でも食べきるわよ?」

そんな2人のことを知っているクロームがその問題点を指摘した。

「大丈夫よ?それだけ大量に焼けばいいだけだから。いくらあの2人でも無限に入る訳じゃ無いでしょ?」

(どうかな・・・?)

内心不安ばかりのクロームである。

「あ、そろそろ頂上よ?ライナちゃんは寝てるけど・・・」

「それだけ、信頼してるんですよ。それにしても・・・」

「「「可愛いわね」・・・」」」

べた惚れである。

3人は頂上からの風景よりもライナの寝顔に夢中になり、観覧車は下に着いた。

「景色全然見てなかった・・・」

「いいじゃない。ライナが可愛かったんだから」

「それもそうね。それで、カミツレさんは今日来てくれるんですか? トウコ達に連絡しようと思うんですけど?」

「あ、そっか。ちょっと待って?フウコにも聞いてみるから」

そう言つてカミツレはライナを片腕にしっかりと抱き、ライブキャスターでフウロに連絡を取り始め、数秒してフウロの声が聞こえてきた。

『どうしたの？カミツレ』

「やつぽー！フウロ。今日、これからライナちゃん『え！ライナが居るの？どこ！？』・・・とりあえず、落ち着いて？それから、ライナちゃんは今寝てるから、あまり大声を出さないでくれる？」

『あ、ごめん。でも、どこで寝てるの？』

「……」

カミツレはライブキャスターをライナを抱いている方の腕に向けた。

『ライナ、久しぶりに見たわね・・・可愛い・・・いいな、カミツレ』

「ふふん・・・。それで、フウロは来る？」

『勿論！』

「それじゃ、サザナミタウンに集合ね？時間は自由だけど、始めるのは夜だから。準備ができ次第向かって頂戴？」

『ええ、分かったわ。それじゃ、また、今晚ね？』

「ええ」

ライブキャスターでの通話を終えて、カミツレたちはバーベキューの材料を買いに向かった。

その道中でヒカリはトウコに今日バーベキューすることを告げ、準備を頼み、本来の目的である買い物を楽しみ、夕方になった頃、材料の買い物を始めた。

ちなみにこの間ライナはずっと寝ていた。

あまりにも長く寝ているので3人は心配もしたが、リヨクが見た所何の心配も無いと言う。

「まあ、エンティとの戦いやら、今日の朝のことやらで疲れたんだろっな？」

そんで、カミツレが抱きついたから、寝ちまつたんだろ？

今晚、ハイにならなきゃいいが・・・とりあえず俺はそれに備えて寝る。起こすなよ？」

そう言つてリヨクはボールに戻り本当に寝てしまった。

それから、買い物を終えてサザナミタウンに戻る途中でライナはやつと目を覚ましたが、辺りが暗くなり始めていることに気付き驚いていた。

「おはよう、ライナ？いくらなんでも寝過ぎよ？まつたく・・・」

「うん・・・？あ、カミツレさん・・・おはよう」

「もう！ホント可愛いんだから！」

「むきゅ・・・カミツレさんもあつたかい・・・」

そう言ったライナを見て、カミツレは更に強くライナを抱きしめた。
クロームとヒカリはライナが目を覚まさないように今の今まで我慢
していたが、ついにその我慢が切れた。

正しく目にもとまらぬ早さでカミツレからライナを奪いぎゅっと抱
き締めた。

「ライナ〜！もう、ずっと寝てるんだから・・・寂しかったんだよ
？」

「あはは・・・ごめんね？クローム？それで、今はどこに行ってる
の？」

「今はサザナミタウンに戻ってる途中よ？」

「あ、ヒカリお姉ちゃん」

「バーベキューをすることになってね？フウロさんも来るのよ？」

「そうなの？楽しみだな・・・お昼も結局食べてないから、お腹一
杯になるまで食べようっと」

「あんまり食べ過ぎたら駄目よ？ライナちゃん？」

「大丈夫ですよ・・・さ、みんな！早く行こう！」

クロームの腕から飛び降りて、サザナミタウンに向かって走り出す
ライナ。

途中で振り返り、その場でぴょんぴょん跳ねながら3人に手を振る。

「ホントに可愛いんだから」

「ね〜?」

「私たちが抱きつくのも分かるでしょ?」

「分かる分かる」

「クローム! ヒカリお姉ちゃん! カミツレさん! 早く行こうよ!」

「待つてよ! ライナ!」

「そんなに急がなくても、バーベキューは逃げないわよ!」

「でも、ライナちゃんは逃げるわよ!」

「は!」

その後、ライナは3人に追いかけられ着く頃には、今度はクロームの腕の中で眠っていた。

人気者は辛いのである。

ライナとクローム

サザナミタウンに着いても未だライナはクロームの腕の中で寝息を立てていた。

既にフウロも到着しており、準備を進めているが、クロームはライナを起こさないように別荘に入った、ベッドに腰掛けた。

「起きてる時はあんなに元気なのに・・・寝てる時は本当に静かね？」

クロームはそういいながら寝ているライナの頬をちゃんと突いた。

「ん・・・」

それによって少し身動きするライナだったが、結局起きなかった。また、規則正しい寝息が聞こえてくる。

「貴女があたしの前に現れてくれて本当に良かった。

特別扱いなんかしないで、普通に接してくれて・・・貴女にとってそれは当たり前のことだったんだろうけど、あたしはそれが嬉しかった」

以前も言っていたことだが、伝説のポケモンはそれだけで、他のポケモン達とは違う目で見られることが殆どだ。

中には誇りを持つ者もいるが、少なくともクロームは違った。

眠る前からずっと自分に『普通』に接してくれる者が現れるのを待っていた。

そんな時に現れたのが、ライナだった。

「ありがとう。」

この世に生まれてきてくれて」

クロームはそう言っ、ライナの瞼に唇を落とした。

「あたしも、生まれてきて良かった・・・本当に」

そういつて今度は額にかかっている髪を上げて、そこにキスを落とした。

チュと軽い音が鳴り、唇を離す。

「・・・う？」

それがくすぐったかったのか、ライナが閉じていた目を開いた。

「あ、ごめん・・・起こしちゃった？」

「うゝ・・・」

まだまだ眠たそうに目を擦るライナは、見た目相応の子どもに見えた。

「まだ眠い？」

こくん、とライナは寝惚け頭のまま頷いた。

「いいわよ？」

寝てても・・・ごはんになったら起こすから」

母親が子に語りかけるように、クロームは優しく言った。

ライナはそれで安心したのか、またゆつくりと夢の中へと旅立った。

「ゆつくりお眠り・・・人の子よ」

クロームは今度はただ見守っていた。

時は少し遡り、クロームが別荘に入った所から始まる。

眠っているライナは夢を見ていた。

イツシュ地方での旅を終えた後、ライナはクロームのたまには違う服をみたいと思い、どんな服が合うのかを考えていた。

やがて考えが纏まり、必要な物を買に行き、作業に取りかかった。

3日ほど掛けてライナはクロームが当初着ていた服とは正反対の白い服を造り上げて、クロームにプレゼントした。

『うわぁ！ありがとうライナ！』

クロームは心から喜び、服の入った包みを抱き締めた。

そしてライナにも抱きつき、ライナも抱き返す。

『早速着てみるね！』

離れたクロームは部屋に行き、しばらくして出てきた。

『『『おお〜!』』』』

その場にいたライナ、ヒカリ、トウコは揃って感嘆の声を上げた。

クロームは普段とは違う格好に恥ずかしがっている様だったが、ライナが造ってくれた服というだけでそれ以上に、嬉しく思っていた。

それからクロームはライナが造った服をメインに着るようになった。

ライナ自身もクロームが喜んでくれていることを嬉しく思っていた。

『喜んでくれて良かったよ』』

『だってライナが造ってくれたんだもん！
喜ぶに決まってるよ!』

満面の笑みでそう言いながら、その場でくるくると回るクロームを見て、ライナも微笑んだ。

「・・・う?」

そこでライナは何か温かい感触を感じて目を開けた。

「あ、ごめん・・・起こしちゃった?」

そこには大切な家族のクロームがいるが、ライナは寝惚けているようにハッキリと確認することができなかった。

「うゝ・・・」

目を擦り、焦点を合わせようとするが、クロームはライナがまだ眠いのだろうと思い

「まだ眠い？」

と聞き、ライナは頷いた。

「いいわよ？」

寝てても・・・ごはんになったら起こすから」

クロームの優しい響きを持つ声にライナは酷く安心し、また目を閉じた。

ライナの心は温かなものに包まれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7737v/>

擬人化ポケモンの世界に転生

2011年10月29日00時17分発行